

# 北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第477号 平成25年1月22日

## 八甲田山（1）

私は毎年、大寒の今頃の時期になると、一世紀以上も前に起こった事件を思い出さずにはおられません。

その事件とは、1902年（明治35年）、陸軍第8師団青森5連隊に所属する雪中行軍隊210名が八甲田山雪中行軍に挑みながら、折からの暴風雪に見舞われほぼ全滅するという悲劇です。

この事件は、新田次郎氏の小説「八甲田山死の彷徨」や映画「八甲田山」を通じてご存知の方も多いと思います。私も、この事件を知ったのは「八甲田山死の彷徨」によってです。ただ、私の脳裏からこの事件が離れない理由は、その悲劇性の為というより、まさに時を同じくして八甲田山雪中行軍を敢行した第8師団弘前31連隊所属の38名（東奥日報記者1名を含む）が、約220キロもの長距離を荒天の下踏破し、無事に帰還しているからに他なりません。

青森5連隊と弘前31連隊は、共に第8師団の第4旅団に属しているのですが、全く同じ厳寒期に、2つの部隊がそれぞれ逆のコースをたどって八甲田山雪中行軍を行いながら、一方はほぼ全滅し、一方は成功したというこの事件は、100年以上もの前の出来事でありながら今日においても、組織やリーダーシップの在り方について多くの示唆を与えています。

## 両隊の行軍計画

| 日程    | 弘前隊               | 青森隊         |
|-------|-------------------|-------------|
| 1月20日 | 弘前 ~ 唐竹 ~ 小国      |             |
| 21日   | 小国 ~ 切明           |             |
| 22日   | 切明 ~ 温川 ~ 十和田     |             |
| 23日   | 十和田 ~ 休屋 ~ 宇樽部    | 青森 ~ 田代(露營) |
| 24日   | 宇樽部 ~ 戸来          | 田代 ~ 増沢     |
| 25日   | 戸来 ~ 三本木          | 増沢 ~ 三本木    |
| 26日   | 三本木 ~ 増沢          |             |
| 27日   | 増沢 ~ 田代(露營)       |             |
| 28日   | 田代 ~ (八甲田) ~ 田茂木野 |             |
| 29日   | 田茂木野 ~ 青森         |             |
| 30日   | 青森 ~ 浪岡           |             |
| 31日   | 浪岡 ~ 弘前           |             |
|       | 11泊12日 約220km     | 2泊3日 約50km  |

(この表は、山下康博著「指揮官の決断」を参考に作成したものです。)

青森隊の計画は、行軍日程を二段構えにし、第1案は「田代新湯」を目的地とする1泊2日、第2案は、「三本木（現十和田市）」までの2泊3日の工程で、第2案は第1案の行軍結果を見ながら決定するというものでした（山下康博著「指揮官の決断」から）。

小説「八甲田山死の彷徨」では、会議の席上で、旅団長の友田少将が突然末席に座っている徳島大尉（弘前隊所属）と神田大尉（青森隊所属）に語りかける場面が描かれています。

友田少将は、やや語気をやわらげて言った。

「徳島大尉も、神田大尉も雪中行軍についてはなかなかの権威者だそうだな」連隊長と大隊長を飛び越えて、旅団長からの直接の言葉であったから、徳島大尉と神田大尉は椅子をうしろにはねとばすような勢いで立ち上がると、まず徳島大尉が

「はっ、雪のことも、寒さのことも知っているといえるほど詳しくは知りませんが、権威などとはとんでもないことであります」と答え、続いて神田大尉は、「平地における雪中行軍はやったことがございますが、山岳雪中行軍の経験はございません」と答えた。

「冬の八甲田山を歩いて見たいと思わないかな」

旅団長友田少将が二人に向けたその再度の質問はいささか、度を外れたものであった。

だいたい、旅団長が、連隊長、大隊長をさし置いて中隊長に話しかけたのが異例だったのに、八甲田山を歩いて見たいかと問うたのは、旅団長自らが、二人の連隊長に直接命令したのも同然であった。

「はっ、歩いて見たいと思います」

二人は同時に答えた。

いささか長い引用で恐縮です。

現実には、この小説で描かれているような青森5連隊と弘前31連隊が旅団長室で八甲田山雪中行軍について申し合わせたといった場面はなかったようですが（山下康博著「指揮官の決断」から）、引用したようにトップリーダーが明確な指示を与えず、一方、部下は上司の思いを忖度しながら行動するというような事は、今日の組織内部においても往々にして見られる事ではないでしょうか。

指示を明確にしないという事は、結局責任の所在が不明確という事でもあります。小説では、徳島大尉に次のようにいわせています。

「師団にしろ旅団にしろ、あの煉瓦作りの立派な庁舎に住んでいる少数の人達は、言わば、事務処理機関の人たちです。自ら雪中行軍を行うのではなく、それを眺める人たちです。（中略）競争しろと、上から命令を出せば、やれ装備が不足だ、予算

がないと噛みつかれるから、連隊自体の責任においてやれと言っているのです。つまり、旅団も師団も、なにかが起きた場合、それは連隊長が自主的にやったことであるという見解を取る積もりでいるのです。」

陸軍省が設置した「遭難事件取調委員会」は、青森隊の遭難は「天候の激変」が原因と天災説を取っています。これにより、組織的な責任は明らかにされず、しかも、弘前隊の壮挙もまた隠される事になりました。何故なら、弘前隊の成功を評価すれば、自ずから青森隊の組織的責任を明らかにしなければならなくなるからです。

次号では、青森隊と弘前隊、両隊の明暗を分けたものは何だったのかを考えてみたいと思います。(塾頭：吉田 洋一)